二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ホワイトプリズンⅡ

仮面の下に暗き熱情は潜む

小説 黄　支　亮
挿絵 カワギシケイタロウ

第一章：辺境の虎 006
第二章：饗宴始まる 045
第三章：無残な仕置き 143

登場人物紹介

Characters

フィオ

母親の再婚に伴ってクレイホーン男爵の義理の息子となる。魔法学校に通う学生。

ポーラ

フィオの血の繋がらない叔母。クレイホーン男爵とは腹違いの妹となる。都の人から淫乱女と陰口を叩かれるほど奔放な女性。

リディア

フィオの幼なじみ。騎士見習いの少女。

マレーネ

辺境伯の令嬢。黒い髪の美女。

クレイホーン男爵

辺境の虎と恐れられる武人。フィオの義理の父親にして養育者。

『第二章　饗宴始まる』より

本当に聞いていなかったのではなかったか。少年はそんなことを思った。
「道を開けなさい！　下郎が」
ポーラはいま一度叫んだ。と、兵士達に動きがあった。男爵の妹御の迫力に負けたというわけではない。兵士達は、ポーラのことなど最初から気にしていなかった。彼らは馬を降りると、フィオが操る馬車のほうへと近づいた。兵士達には表情が全くなかった。
「何をするのですか！」
ポーラの声には脅えがあった。少年は肝を潰して息をするのがやっとである。そして裸の女は淫薬の強烈な効き目に身悶えしている。
そして。兵士の一人が馬車の中に手を入れた。ポーラが、次いで黒髪の女が引きずり出された。
「やめなさいっ、やめ……」
ポーラは憤ったが、兵士達は全く聞いていなかった。そして、聞かないままにポーラの赤い上着が剥ぎ取られた。
「ああーっ」
ポーラの豊かな乳房がぽろっと露になった。真っ白い肌に、大きめのちょっと暗い紅色の乳輪。
「何をするのっ、やめっ……やめなさいっ」

ポーラの顔ににわかに恐怖の色が濃くなった。彼女はまさか、男爵家の人間である自分がそのようなことをされるとは思っていなかったのだ。彼女はまだどこかで異母兄のことを信じている部分があったのだろう。だが、彼女の考えは甘いものであった。兵士達はそんなポーラの両腕を左右から押さえつけた。美女は必死になって逃れようとしたが、彼女の努力の結果は、豊かな張りのあるバストが左右にぶるぶると震えただけであった。

「ああーっ！」

捕らえられたのはポーラだけではなかった。黒い髪をした美女もまた兵士達の手に落ちた。淫薬に蝕まれた女は兵士の一人に羽交い締めにされていた。黒髪の美女も必死になって最後の理性でもって抵抗する。だが、彼女の努力も空しいものとなってしまった。体を覆っていた布きれがはらりと落ち、美女はまたしても白日の下で全裸をさらすことになった。

「ポーラさん！」

少年は絶叫したが、彼も兵士によって捕らえられており、女のことを助けることなどできるわけもなかった。

「ああーっ、嫌、やめてーっ」

ポーラは今や無力な女となってしまっていた。兵士達はそんなポーラを義理の甥っ子の目の前で全裸に剥こうとする。

「駄目、甥の前では……ああーっ」
ポーラは両足を踏ん張ったが、兵士達はポーラの抵抗を抵抗として感じていなかったのではないか。
「ポーラさん！」
「ああっ、フィオっ、フィオーっ！」
美女の唇から絶叫が漏れた。兵士の手がポーラの腰にかかり、スカートが一気にずりおろされた。
「！」
少年の視線はポーラの股間に釘付けとなった。若く美しい叔母の股間を覆うのは申し訳程度の白い小さな布きれであった。あまりにも小さな逆三角形の下着は、女の深い栗色をした密林を隠すのには小さすぎ、恥毛の大部分が隠れきらずにぶざまにはみ出ていた。兵士達は、手入れのされていないポーラの股間を甥に見せつけるようにして、女の両足を大きく開かせた。
「嫌よ、嫌よ、嫌ー」
ポーラは首を振って抵抗したが、両手両足を大の男四人に抱えられては、彼女が無残な開陳劇から逃れることなどできるわけもなかった。やがて。必死に手足を強ばらせるポーラの股間に兵士の手が伸びた。そして、ぴりっと何かが裂けるような音が人気のない森の

中に響いた。白い布きれ、ポーラの体を守る最後の小さな砦が貫かれたのである。逆三角形をした股間によく食い込む小さな下着は路の上に蝶のように舞い降りて、それから動かなくなった。

「あはーっ、だめ、だめ、だめーっ」

ポーラは首を振った。淫乱女といわれたポーラもそれは王国の貞淑な人々からすればというだけのことであって、言われるように百人の男を乗せてきたなどという噂も真実とはほど遠いものであったのかもしれない。

「嫌、フィオーっ」

ポーラは甥の名前を必死に呼んだ。彼女にはそうすることしかできなかったのだ。両手両足を押さえつけられ、白い肌を昼日なた、それも屋外でさらす。初めて味わう屈辱とそれにともなう怒りに美女は打ち震えていた。

「二人を離せっ！」

フィオも必死になって叫んだが、兵士達はフィオを無視した。それどころか、フィオのことを嘲り、煽るようにして美しい叔母に刑罰を加える。

「嫌、あの子の前で、こんなことは、駄目、許してっ！　あぁーっ」

ポーラの両足が兵士達によって無慈悲に大きく広げられた。それはまるでフィオに見物させるように無残で非道な行為であった。ポーラが着けているのは今や赤いヒールだけで

あった。裸足の上にヒールだけを着けた全裸の美女の栗色をした縮れ毛が少年の目の前に突き出される。少年は兵士に押さえつけられたまま、叔母の豊かで艶めかしい体を食い入るように見ている。

――ポーラさん……。

少年は唇を噛んだ。自分が愛してやまない美女が裸にされて、今まさにレイプされかかっているというのに自分には何一つできないのだ。本当は誰でもない自分こそが犯したいと思っていた女が、大勢の男達によって捕らえられ、辱められようとしている。だというのに少年は何もできない。そして、このような状況にありながら少年の下半身には興奮した血が集まり肉杭は硬直してさえいる。

「駄目、見ないでーっ」

ポーラは空に向かって吠えた。だが少年は叔母の肉体から目を反らすことができなかった。

――ポーラさんのあそこだ……。

少年はのどの上のほう、扁桃腺の辺りが砂漠のように渇いている。美女の恥毛の森の奥には大輪の肉の華が咲き誇っていた。大きく発達した土手まわりには手入れをされない栗色の毛が密生し、奇妙にねじけた陰毛の向こうにはびらびらとした収まりの悪い不細工な薄肉が見て取れた。淫乱と皆が言い、しかし多くの男があこがれる王都屈指の美女の性器

が少年の目の前であられもなく広げられているのだ。女を助けられないとは男として実に情けないことであったが、男であるからこそ女の破廉恥な姿に興奮する。少年は愛する叔母の姿から目が離せない。そして、そのようなフィオに敗北感をさらに味わわせるようにして兵士の一人がフィオのズボンをずりおろした。

「ちょっと、やめ、やめて……」

少年はびっくりしたが、彼も淫欲の魔の手から逃れることができなかった。

フィオはたちまちに下半身を剥き出しにされた。少年のペニスが西日の中で硬く屹立していた。

「フィオ……」

ポーラは少年のペニスに嫌悪感を示さなかった。少年がそうなることは仕方がないことであり、責められるべきが素直な甥ではないということをポーラも知っていたからである。

「あなた達、こんなことをしてただですむと思うの！」

ポーラの問いに兵士達の反応はなかった。

「王法では貴婦人の強姦は死罪よ……。そのことが分かっているの？」

男達はしかし脅えもしなければ恐れもしなかった。一切の感情のない生ける屍。彼らはまばたきをしない目を何もない中空の一点に向けたままただ呼吸をしているのだ。そのような相手にポーラの脅しが通用するわけがなかった。そして何も感じないままに兵士達は

生贄への責め苦をより激しいものとする。
「そ、それは……」
兵士の一人が持ち出したものにポーラは声を震わせて言った。兵士が持ち出したのはガラスの瓶であった。フィオもそれに気がついた。
――服従の薬……。
女の肉体を確実に蝕み、性の悦びの前に屈服させる秘薬中の秘薬。兵士達がそれを誰に使おうとしているかは明らかであった。
「まさかそれを私に……」
ポーラは慄然としている。庶子とはいえ彼女は名だたる名家の出身なのだ。その女性に奴隷の製造薬を使う。それもどこの馬の骨とも知れぬ下郎が。ポーラにはそのことが信じられなかった。
「嫌、嫌、それだけは駄目！」
美女は身をよじって逃れようとした。
それを使われて最初に注がれた精液の持ち主との交合は、普通の行為で得られる快楽の数倍から数十倍にもなるという。その素晴らしい快楽を欲するあまり女達は文字通りどのような破廉恥な行為も喜んでするようになる。
「ポーラさんにそれを使うのはやめろーっ」

フィオも必死になって叫んだが、男達の圧倒的な暴力をとどめることは最初から不可能であった。瓶からどろりとした水飴状の薬がポーラの肌の上に直接ぶちまけられた。

「あはーっ、嫌ーっ！　嫌ーっ！　やめてーっ！」

ポーラは気が違ったように髪を振り乱した。兵士達はそんな女のくすんだ色をした右の乳首に淫薬を擦り込んだ。

ぐりぐりぐり……。

兵士の武骨で汚らしい指先の愛撫を受けてポーラの乳首が上下左右にぐりぐりと回転する。

「ああーっ！」

ポーラは全身を力ませる。美女の黒ずんだ乳首は男の指の刺激を受けてたちまちのうちに硬く尖っていく。すぐそばでその光景を見せつけられていたフィオにも叔母の乳首が勃起していくのがよく分かった。

「嫌、嫌、ああーっ！　やめてーっ」

ポーラは眉間を歪めて苦悶の声を上げた。だがフィオはポーラの歪んだ顔を醜いとは思わなかった。

「ポーラさん！」

半ベソをかきながらフィオも愛しい叔母の名前を呼んだ。兵士達は男女の悲しいほどの

呼び合いに何も感じなかった。そして何も感じないままに今度はポーラの左の乳首に魔薬を塗り始める。
「あっあっあっ！」
黒ずんだポーラの二つの乳首が揃って淫薬に侵されていく。少年は兵士の手を振りほどいて叔母の元へと駆け寄りたかった。だが、非力な彼にはそのようなことは最初から無理なことであった。と、兵士がフィオが一番恐れていたことを始めた。
「ポーラさんの体に触るな！」
少年の叫んだ声が空に吸い込まれていった。兵士達は美女の股間に手を差し入れたのである。多くの男が望み、フィオも心のどこかで一度はと望んでいた美女の股間に咲く一輪の華、男を誘う甘い香りが漂う神聖な肉華に兵士の汚れた手が触れたのだ。
「うあっうあぁーっ」
ポーラは太陽の下でこのような破廉恥な責め苦を受けることになるとは一度として思ったことがなかったに違いなかった。美女は天を仰ぐように上体を反らしたまま絶叫した。
「そこは、そこは嫌、そこだけはーっ！」
女の反り返った黒い影が地面の上に長く伸びる。
「ああっ！　ああーっ！」
悲痛な叫びを上げる若く美しい叔母を前に少年は悔しさと怒りと激しい欲望を感じてい

た。少年はできることならば兵士達をこの場で叩き殺してしまいたかった。それだけではない。美しい叔母を奪ってその中に兵士達の代わりに白い精のすべてを放ちたいと狂おしいまでに思ったものである。

「いや……駄目……」

ポーラはブツブツと言った。すでに兵士の指はポーラの股間に達しており、不器用な動作でもってご禁制の魔薬を肉の華にたっぷりと塗り込めているところであった。ポーラの肉奴隷への最初の門は今や完全に開かれてしまったのだ。後は、兵士のうちの誰かの精がポーラの中に放たれ、そして花嫁の意に沿わないまま婚礼は終了することになる。以後、ポーラは愛してもいない男のペニスを肉華に挿し入れてもらうためならばどのようなことでもすることになるだろう。フィオにはそれがどうしても耐えられなかった。

絶望と諦めに少年は立ち直れないほどに打ちひしがれていた。

「あっあっあっ……」

ポーラの肉華全体に塗りたくられた淫薬の効能は抜群であった。ものの数分もたたぬうちに美女の顔は恥じらいと興奮によって朱に染まり始めた。吐く息には少しずつ甘えるような色が混じるようになった。自分が見ている前でポーラが牝に堕ちようとするのに少年は激しい怒りとともに興奮を覚えていた。

びくっびくっ……。

ポーラの腰が引きつけを起こしたように奇妙にリズミカルに震え始めた。抑えようにも抑えきれない子宮の反乱に美女は動転しているようであった。

「フ、フィオ……ああうっ」

ポーラは鼻で甘く鳴いた。彼女の理性が崩壊するのももはや時間の問題であった。

――もう駄目だ……。

少年は自分の体から力が抜けていくのを感じていた。ポーラは薬によって籠絡（ろうらく）され、そして、もう一方の辺境伯の令嬢もすでに兵士達によって全裸の上に縄をきりきり打たれている。真っ白で柔らかな肌に荒い縄は恐ろしく美しく映えていた。

「ううっ……ああっ」

黒髪の令嬢の股間にはがっちりと縄が食い込んでいた。縄は巧みに結び合わされており、その結び目が女がもっとも感じる肉豆の部分に当たる仕組みとなっていた。女は一足歩むごとに股間から伝わる縄の快感に身悶えすることになるのだ。

――何もかもがおしまいだ……。

フィオは天を見上げた。少年も女達も後は最後の一刺しを受けるだけとなっていた。フィオが受ける一刺しはナイフのそれであり、女達のそれは男達の焼けた肉杭である。どちらにせよ本人達の望まぬことであり、不本意なことであった。

だが。

少年達の頭の上にのしかかってきた不運の雲が一瞬だが不意に途切れたのだ。それは闇夜の雷光のように鮮烈な天祐であった。

「待て！」

ポーラのそれでも、伯爵令嬢のものでもない、誰かの声がその場に響いた。

「不届き者め、そこで何をしているのか！」

狼藉を働く兵士達の動きが初めてそこで止まった。ポーラと伯爵令嬢の視線が天の加護とも言うべき救いの主に向けられた。だが、唯一フィオだけは、これは駄目だとうなだれたものである。天に上がった花火は不発のまま終わることになるだろうと少年は予期していた。なぜならば彼は声の主のことを非常によく知っていたのだから。

「女性にかかる破廉恥な行いをなすとは貴様ら、兵士としての誇りはないのか？」

威勢よく兵達を大喝したのは騎士見習いの少女であった。西日に横顔を射たせるリディアの顔は不遜であった。少女の手にはすでに反り身の刀が握られていた。

「フィオ、情けないわね、何やってるのよ。ちんぽこ丸出しじゃない！」

リディアは遠くからフィオに罵声を浴びせた。少女は剣の腕が立ち、それだから彼女が自信を持つのはフィオも分かった。しかし、同時にフィオはリディアが自信過剰に陥っていることを前々から不安に思っていたものである。

「あんたの家で何かおかしなことが起こっているようだと思って、探りを入れてみれば案

の定、このざまよ」
　リディアは刀をすっと振り払った。少女は七人を相手にたった一人で立ち回ろうというつもりなのだ。蛮勇というか気違い沙汰である。フィオはそこで慌てて言った。
「リディア、いいから、早く逃げるんだ！」
「逃げる？　馬鹿じゃないの！　ちんぴら兵を相手に聖騎士候補のあたしが背中を見せるなんて冗談じゃないわ！」
　いきがるリディアに向けて、兵士達がゆるゆると進み出る。フィオを捕らえる一人とポーラを押さえる二人、そして、伯爵令嬢につく一人の四人を残して、三人がリディアのほうに向かっていく。彼らにしてみれば、リディアは新しい獲物でしかなかったろう。リディアはまだ発育途上にあったが、これから美しい女性になることが確実な娘であった。兵士達にとっては可愛がりがいのある生贄であったに違いない。一方、リディアのほうは自分が英雄になることはあっても破廉恥な奴隷になる意志は持ち合わせていなかった。彼女はおそらく、七人の兵士が全員、戦線に出てくることはないと計算したのだろう。大事な生贄を守るために何人かは後方に残る。七人が相手であれば難しい戦いも、三人か四人が相手であれば何とかなる。少女はそう読んでいたのだろう。だから、このシチュエイションは少女の計算どおりであった。
「さあ、来なさい。このリディア様の力を見せてやるわ。そして、あたしは英雄になる

の！」
少女は狂信者の目をして言うと、白刃を赤日の色に閃かせた。兵士達はしかし無言のまま少女のほうに近づいていく。刀を抜こうともしないのだ。リディアもさすがに武器を取らない兵士達に怯んだようである。
「どういうつもり？　あたしには素手で十分ということ？　そっちがそうならこっちはこっちで勝手にやらせてもらうわ！」
少女は兵士のほうに走り出した。二度、三度、片刃の刀が輝き、鉄の触れあう耳障りな音が響いた。そして。
「嘘……」
悲鳴を上げたのは兵士達ではなく刀を振るった少女のほうであった。リディアの加撃が外れたわけではない。少女の切っ先は確実に兵士達を捉えていた。おそらく、本当であれば致命傷となったものもあるだろう。だが、兵士達の中に倒れる者はいなかった。兵士達が着ている革の鎧は破れ、胸や腹からはどす黒い血がこぼれ落ちていたが、兵士達は全く動じなかった。と、いうか、彼らは自分が斬られて負傷したことすら気がついていないようであった。
「そんな馬鹿な……」
呟いたのはフィオであった。ここに来て彼は改めて自分達が容易ならざる状況にあるこ

とを思い知らされた。
「リディア、早く、逃げろ、逃げるんだ！」
少年は叫んだ。最初からリディア一人の手に負えるような問題ではなかったのだ。今となっては彼女の命と肉体だけでも救わなければならない。少年はそう思って警告したのだが。
「いやーっ！　何すんのよっ、ああーっ」
フィオが警告を発した時にはすべてが手遅れであった。長身の明るい茶色の髪をした少女のまわりに兵士達がたちまちに殺到する。まず少女の手から刀が叩き落とされる。次いで真鍮の聖印が引きちぎられた。
――やっぱりあいつら人間じゃない！　蘇生法で甦らせた死人か、死霊に取りつかれてるんだ！
少年は思った。何かおかしいと少年が感じていたとおりであった。魔法の中には死んだ人間を一時的に甦らせて使役するという技法があった。あるいは死霊と呼ばれる不思議な存在の中には人を取り殺して、肉体を乗っ取るものがあるという。あるいはもっと別なものかもしれないが、一つだけいえる確かなことは、兵士達がすでに人間ではなく、と、いうことは彼らを指揮する人間は邪悪な存在であるということであった。
――義父上……。

クレイホーン男爵もまたすでに人間ではないということなのだろうか。そして。フィオが思考を続けるうちに事態はさらに悪いほうへと転がっていく。

「ああーっ、何すんのよっ、変態ーっ」

後ろから押さえ込まれたリディアの僧衣に兵士の手がかかる。そして、ぴりっという布の裂ける音が響いた。

「いやーっ」

リディアは恐慌状態にあった。ポーラに続いてリディアまでもが少年の目の前で乳房を強制的に露出させられることになった。

「や、やめて、見ないで、見ないでよーっ」

先ほどまでの勇気もすでにどこかに消えてなくなり、リディアは男の暴力にただただ恐怖するだけの普通の少女になっていた。

「リディアーっ！」

子供の頃からの友人の窮地にフィオは大声を出したが、兵士達は自ら死地に飛び込んできた美少女の肉体にも伯爵令嬢やポーラと全く同じ下準備を施そうとしていた。

「な、何よ、何よ、何よーっ」

リディアは泣きそうになるのを必死にこらえている。少女は鼻っ柱ばかり強くて守りに入るとひどく弱い人物であった。フィオはそのことをよく知っていた。そんな強がりな娘

の乳房に、兵士の一人があの淫薬を塗りつけた。
「変態っ、変態っ、何すんのよ、嫌ーっ」
リディアの乳房はポーラや伯爵令嬢のそれに比べるとボリュームの面で遥かに見劣りがした。膨らみも小さく、乳輪も乳首も小粒であった。肌の色も少女は浅黒く、必ずしも女性的とはいえなかった。だが、それだからといって彼女の体が醜いというわけではなかった。十分に鍛えられた筋肉は硬く締まっており、たるんだ贅肉の類はいっさい認められない。健康的で中性的な美しさの持ち主なのだ。
「そんなところいじらないでよーっ」
リディアは体を前後に揺すったが、男達は少女をがっちりとつかんだまま放そうとしない。そしてそのまま彼女の小粒の乳首にポーラに塗り込んだものと全く同じ、あの服従の薬をなすりつけていく。
「あっ、あっ、何よこれ、何よーっ」
リディアは自分の肉体に擦り込まれる薬の正体については知らない。今となっては知らないほうが幸せであったかもしれない。そして。
「や、やめてよ、お願い……」
兵士の掌がズボンに触れたことでリディアは慄然となった。だが、少女の哀願も空しかった。男の手が少女の穿くズボンにかかった。そしてそのまま少女のズボンは引きずりお

ろされてしまった。
「ああーっ」
少女は叫びを上げた。フィオは歯噛みをし、そして同じ運命をすでに先行しているポーラは紅潮させた顔を背けた。伯爵令嬢は縄の苦痛に耐えるのが精一杯で、他人のことを構っている余裕はない。
「駄目、そこは駄目、そこは駄目だったら」
リディアは顔を振って抵抗した。少女の純白の下着が兵士達のナイフによって切り裂かれ、そして、三人目の裸婦が誕生した。少女は痩せていて手足がとても長く、スマートな体形をしていた。腰回りはまだ発育途中といった感があったが、それでも股間はダイヤ型をした黒い茂みで覆われていた。少年の目では捉えることができなかったが、茂みの奥には可憐な華が咲いているはずであった。
「リディアを離せ、離せ、離せ……」
フィオは必死になって唯一できる言葉による抗議をしたが、兵士達はそれを全く黙殺して、獲物の調理を続ける。少女の細く長い足が男達の手によって左右に広げられた。そして……。
「う、うわあああっ」
リディアは意味不明の叫びを漏らした。兵士がいきなり女のもっとも神聖な部位に手を

差し入れてきたのだ。自分の女の部分を普段あまり気にしていないリディアにとっては、それは驚くべきことであったに違いない。
「あっあっあーっ」
少女の可憐な華の上で初めての男の指が踊る。透明な水飴が性器の上に満遍なく染み渡っていく。
「駄目っ、かはあっ！」
少女は目を見開いて喉の奥から絶叫した。
「フィオ、フィオ、助けて、助けて！」
少女は必死になって助けを求めている。やがて兵士達の指はリディアの胎内にまで入り込むだろう。フィオの幼友達はかくしてこのような無残な処女散華を迎えることになるのだ。それでいいのか？
——いいわけがないじゃないか！
少年は我と我が身に怒りを覚えた。自分はいったい何をやっているのだろう。自分の身も守れず、女達のことも守れない。リディアの悲痛な叫びが少年の耳に聞こえる。
「フィオ、フィオー」
聞いてはいても何もできない。何も。それどころか彼は自分の愛する人々の恥辱に興奮して肉杭を硬くしているていたらくなのだ。

――何とかしなければ。でもどうしたらいい……。

無力感と後悔に少年は打ちひしがれていた。もっと効果的な魔法を学んでいればよかったのではないか。フィオの同期生の中には電撃を放ったり、火球を自在に操る者さえいた。そのような技術があればこのような状況を切り抜けることができたのではないか。だが少年はそのようなことは学ばなかったし、学んだからといって技術を習得することは難しかっただろう。算術や文学と違って魔法というものは素質が物を言う技術である。工芸であるとか美術に近い学問であった。必要なのは器用さでありある種のセンスであった。フィオにはそのような破壊的なセンスが残念ながら欠如していた。もっともそれだからといって少年が能なしというわけではなかった。彼は破壊よりも成長を促したり、傷を修復する創造的なセンスに優れていたのである。そして、そのような能力がこの場合あまり役に立たなかったというだけのことである。

「フィオ、いやーっ」

リディアの泣き声が少年にも聞こえた。全裸にされた初心（うぶ）な少女には淫薬はあまりにも効果的であった。年の若い娘は、これまでに何かをくわえ込みたくてしかたがなくなるというような激しい欲望を抱いたことがなかっただろう。

「あっ、あっ、ああっ、何よこれ、何を塗ったのよ……」

リディアはすでに足腰がふらついて立っているのがやっとといったありさまである。そ

『第三章　無残な仕置き』より

かを知って顔色を失った。
「そ、そんな……まさか……」
ポーラが絶望的に言った。
「ああ、嫌、嫌、嫌！」
それを見るマレーネの目が恐怖に見開かれている。リディアに至っては屈辱とこれから起こるだろう自分の体への無残な仕打ちに対する恐怖で声が出なくなっている。
それは豚であった。闇から這いずり出てきたのはまるまると太った一匹の雄豚であったのだ。人の背丈ほどもあるだろう大きな汚らしい獣。しかも、その獣は種をつける牝を前にして奇妙な形をしたペニスを大きく怒張させていた。
「……特別に調教を受けた豚だ。人間の女を犯すための特別な調教を受けたな。その方達は今からこの豚に犯されるのだ……」
男爵は言った。やはり仮面の男は卑劣であったのだ。この人間の形をした悪魔は女達を苦しめることだけしか考えていなかったのである。
「いやよ、豚が相手なんて、そんなの！」
ポーラは遅ればせながら反抗を開始する。だが、二人の兵士に押さえつけられていてはポーラもどうすることもできない。
「……妹よ。豚の味わいも悪くないぞ。その雄豚は女の感じるツボを心得ておる。力を抜

いてたっぷりと楽しむとよい」
「そ、そんな……」
ポーラの声はかすれて、次が出てこなかった。女奴隷達には死刑よりもつらい現実であった。そして、それはフィオにとっても同じであった。愛する女達の神聖な肉壺が、自分だけが占有することを許された秘密の花園が汚されてしまうのだ。それも事もあろうに不潔極まる雄豚によって。
「義父上、やめてください、お願いです！」
フィオは躍起になって義父の乱心をとどめようとする。だが、そのような努力は最初から無駄であった。
「女達よ。汚れた豚に犯され、その屈辱に耐えることができるだろうか。耐えることができるのであれば、その方達とその方達の主とのこの場での交合を認めよう。そしてフィオよ。もしも豚のペニスに感じ、精液にまみれた女達をそれでもなお望むのであれば、そなたにそなたの奴隷達との交合を許そう」
男爵は言った。
これこそが真の試練であった。男爵は卑劣な手段でフィオと女達の間にある絆を試し、あるいはこれを破壊しようとしているのだ。獣相手に猥らに悶え狂う女達をなお少年は抱き、慰めることができるだろうか。女達は豚を相手とする獣姦に耐えることができるのか。

フィオと、女達の視線が不安のうちに絡み合い、そして男爵は豚を押さえる兵士達に手を上げて指示を出した。いきり立ったペニスを持つ雄豚が、尻を突き出すようにして兵士達に押さえつけられた牝達の前に放たれた。女達は恐怖と屈辱、そしてこれから起こるだろう恥知らずな行為で味わう初めての快感に揃って目を大きく見開いた。

「ああ……」

リディアが絶望のうめきを漏らした。少女は、まさか自分がフィオとこんな形で結ばれることを予期していなかったし、また、その後にこのようなセックス拷問をその身に受けることを思ってもいなかっただろう。

――もう死んでしまいたい。

気が強くプライドの高いリディアのことであるから、そのように何度も思ったはずである。だが彼女にはそうすることはできなかったのだ。なぜならば、服従の薬をその身に使われてのフィオとのセックスは、リディアにとって何ものにも代えがたい素晴らしいものであり、その素晴らしいセックスは死んでしまっては味わうことができないからである。

――あれを一度しかしないうちに死ぬなんて嫌。

リディアは頭の片隅で死を意識していたが、そのような選択ができないだろうということをリディア本人が一番よく知っていたのである。リディアだけではない。ポーラにしろマレーネにしろ自ら死を選ぶということは考えていなかった。

――生きてもう一度、フィオの欲棒を受け入れたい。
たとえ我が身が汚され尽くそうとも、女達は生きる必死さのようなものを持っていたのである。そして、女達が生と性の執着を絶対に断ち切らないということを男爵も知っていたのだ。男爵は女達とフィオとの間にある強固に過ぎる絆を利用している。そして女達が人参よろしく目の前にぶら下がるフィオのペニスのために頑張れば頑張るほどに、女達の肉体はいよいよ猥らで救いようのないものへと堕していく。
「……さて、豚はどの牝を最初の相手とするであろうかな。フィオよ、どのように思うか」
男爵は見物を決め込んでいる。彼はすでに自分の手元から逃げ出した花嫁のことや、花嫁を犯した少年のことなどどうでもよいと思っているのだろう。勇猛な部隊長として名を馳せた辺境の虎は、いったい何を考え、何を望んでいるのだろうか。
「辺境には、古い時代の異端の法が残っておる。古い時代の暗黒法の中には女達を責め立てるためだけに編み出されたものがいくつもあるのだ。魔豚の技術もその一つ。服従の淫薬によって女を我がものとした男達は、余興として豚に自らの女奴隷達を責めさせたという。あるいは、情欲に狂った年増女達は自らを慰めるために魔豚を使ったという」
男爵は冗舌であった。
「魔豚は何代にもわたって女の責め方を調教されておる。女の股間をすすり秘肉を暖め、ついには女の中心に太く硬い獣の欲棒を突き立てる。年季の入った年増女でさえも悶える

ほどの肉の味わいを存分に楽しむとよい」
　男爵は女達に死刑の宣告を下した。そして、ついに魔豚の邪悪な目が三つの蜜壺のうち、最初の標的を定めた。
「あ、あ、あ、来ないで、フィオ、いや、何とかして、ああーっ」
　豚が最初に食指を動かされたのは鍛えられた肉体を持つ若いリディアであった。刀技や馬術の訓練によってよく締まった少女の青い肉体は豚にとっても好ましいものに見えたのだろうか。
「助けて、ああーっ」
　リディアは自分の小さな姫貝が雄豚に狙われていることを知って、全身の筋肉を突っ張らせて逃れようと努力をした。だが、巨大な力で上から押さえつけてくる兵士の前では少女の努力など最初からしないのと同じことであった。彼女の努力によって、できたことといえば、小さな尻を数センチばかり揺するということと、突き出された尻の真ん中に咲いている菊華の回りの筋肉をぴくぴくと動かすことだけであった。そして、それは少女の思いとは全く反対の効果を上げることになってしまった。豚は少女が一刻も早くつながりたいとアピールしていると感じたのだろう。二つに割れた爪を持つ四つ足の生き物は、他の二人の女のことをとりあえず放っておいて、リディアのほうへとまっすぐに近づいていった。

「あはあっ、ああーっ！　だめーっ！」
リディアは泣き叫んだ。
「リディアーっ！」
フィオも興奮して絶叫する。もはや幼なじみの小さな青い肉壺を守るすべはどこにもなかった。
「リディアちゃん！」
ポーラも少女の名前を呼んだ。リディアの肉体に与えられる責め苦はすぐにポーラにも与えられることになるのだ。
「うう……」
マレーネは硬く目を閉じている。黒髪の美女の目からは涙が溢れている。いったいマレーネは何に対して泣いているのだろうか。少女の不運に対してであろうか。それとも自分の悲惨な身の上だろうか。男爵に対する恐怖。恥辱。自分の生涯の主である少年の前で感じてしまうだろう猥らな肉体に対するふがいなさもあっただろう。
「ああ、フィオ、フィオ、怖いよーっ」
少女の顔が恐怖で引きつる。そして。
「うあ、うあああっ」
リディアの喉から叫びが漏れた。ついに雄豚がリディアが突き出した尻の間に舌を入れ

てきたのである。もはや少女の処刑は不可避であった。

「あ、ああ、あああーっ！」

びくっびくっとリディアは肉体を小さく痺れさせる。魔豚の舌は少女の姫貝をまるで餌でも喰らうように不粋に、無遠慮に舐め始める。リディアは想像もしていなかったような無残な現実に混乱し、我を失っている。そして、そんな少女に自分の未来の姿を重ねるポーラとマレーネは額に脂汗を浮かべて、声もなく少女が責め立てられる姿を見ている。

「フィ、フィオ……」

リディアは想い人の名前を譫言のように繰り返す。豚はそんな少女のことを全く気にすることもないままに、刷り込まれた自分の本能に忠実に少女の肉華を舌で刺激する。綺麗な肉襞をこじ開けるようにして舌を入れ、じっとりと滲んでいる少女のラブジュースをすすり、クリトリスを乱暴に舌先で突く。豚には優しさであるとか思いやりといったものは全くなく、その舌の動きは粗暴で乱雑であった。だが、それがリディアの体にとって耐え難い苦痛であったかというと、そうではなかった。豚の舌の動きは乱暴で、少女の股間はまるで飼料桶のような扱いを受けていたが、獣の舌によって少女の股間が傷を負うようなこともなければ、秘肉が突き破られるというようなこともなかった。豚の調教は完璧であり、少女は予測していたものとは全く逆の『心地よさ』を感じていたのである。

唯一、リディアが苦痛と感じていたのは、自分が豚のような低劣な生き物の前に感じて

しまうということを認めることだけであった。
「フィオ、ああ、フィオ……。どうすれば、どうすればいいの」
リディアはフィオに助けを求めた。そして、少年は彼にできることをするだけであった。
「リディア、痛いかい、苦しくないかい？」
男爵はフィオのアドバイスをとどめることはなかった。
「ああ、フィオ、ああ……」
少女の顔に火照りが見え始める。フィオはリディアの子宮でくすぶっていた白い欲望が豚の舌に性器をこねくり回されることで激しく燃え上がったことを少女の表情から見てとった。
——気持ちいいんだ……。
少年はしかし自分の奴隷の粗相を憎んだりはしなかった。むしろ、少女が快感に身を震わせてくれたほうが、苦痛にのたうち回られるよりもよっぽどよかった。
「リディア、気持ちいいかい？」
フィオは訊ねた。リディアの子宮はこれまでの破廉恥な責めの連続により、すでに破裂寸前までに高ぶっていた。豚の直接の舌責めにリディアが感じないわけがないのだ。
「恥ずかしがることなんかないよ。大丈夫。リディア、気持ちいいかい？」
少年は必死だった。リディアを落ち着かせて、何とか未来に希望をつながなければなら

ないのだ。
「ああ、フィオ、ああっ、そんなことは……」
言えばきっと猥らな自分を憎むようになるだろう。リディアはそのように考えているのだろう。少年は語り続ける。男爵は義理の息子を止めなかった。
「気持ちいいなら、それでいいんだよ。リディア、気持ちいいならばそれでいいんだよ」
少年はリディアに呼びかける。少年はリディアの心までもが犯されて、傷つくことがないように懸命に努力をする。
「リディア。いいかい、感じているのならば素直に感じるんだ。いってもいいよ。獣に犯されたって君は何も変わらないんだから」
少年は男爵の様子をうかがっている。仮面の怪物はフィオの言葉を止めようとはしない。言葉などというものが暴力の前では無力であると知っているからなのか、それとも、何かの理由をもってわざとフィオの好きにさせているのか。フィオにはそれが分からない。
「フィオ、フィオ……」
リディアの眉間にはすでに悦びの色が表れている。隠したくても隠すことのできない女の悦び。少女の子宮はしかし葛藤している。奴隷の自分が奴隷主の許しのないままに快楽を貪っていいものか。そのことがリディアにとっての最大の苦痛であった。
「リディア、大丈夫。君は獣に犯されても美しいんだ。いや、獣に犯されれば、そのぶん

だけ君は美しくなれる。僕は君のことを今よりもずっと愛せるようになる。僕はこの試練に耐えてみせる。だから、リディアも頑張るんだ」

少年は少女に笑いかけた。リディアの子宮の葛藤は主人の『感じてもいい』という許しを得たことで急速に解消されつつあった。確かに豚との交合は異常で変態的な行為である。しかし、それを牝奴隷と奴隷主の絆を深める試練であると信じることができれば決して越えられないものではない。

「うう、フィオ……」

リディアも笑ったようであった。豚はそんな少女の股間を舐めることをやめた。獣に舐め、吸われた少女の小さな姫貝はほどよく濡れそぼり充血して膨れ、後は肉の欲望が入ってくるのを待つばかりであった。

「ううん……」

ついに四足の獣の前足が、床の上で丸くなる若い牝の上にかけられた。怒り狂った豚の奇妙な形をした長いペニスの先端が少女の経験の浅い肉貝に向けられる。

「う、う、う……」

豚のペニスの先端が少女の肉華の上を焦点を定めるようにして旋回する。肉が擦れ合う感覚にリディアは思わず甘い声を漏らしてしまう。そして。その時が出し抜けにやってきた。

「う、うあ、うあああっ」
豚のペニスが少女の股間の茂みに潜む可憐な花弁をこじ開けにかかる。
ぐりぐりぐり……。
獣の動きはフィオのもののようには巧みではなく、また繊細さのかけらもなかった。豚は少女の秘蜜の泉に汚れたペニスを半ば無理やりに押し込んだ。魔豚のペニスは人間のそれよりも長かったが、人間のそれのようにしっかりとした返しはなかった。太さはフィオのそれよりもわずかに細かったであろう。それでも豚のペニスそのものは少女にとって『物足りない』代物ではなかった。
「あ、あ、入った、入っちゃった……」
少女の唇から涎が垂れた。リディアの体は豚のペニスを受け入れ、がっちりとこれをくわえ込んでいた。
「ああ、なんか変、変な気分……うう……うああ」
豚のペニスの味わいにリディアの体は急速に順応しているのがフィオにも見て取れた。豚とのセックスは最初の一刺しのハードルが高いだけで、そのハードルを越えれば、あとに待っているのは快感なのである。もとより古い時代の年増女達が自らを慰めるために選んだ相手なのである。性の悦びを覚えたリディアが乗り越えられない試練ではなかったのかもしれない。

「リディアちゃん……」
ポーラが励ますように少女に声をかけた。リディアは尻を突き出した形で、仲間の奴隷や奴隷主に見せつけるように豚に貫かれている。獣は柔らかい肌を持つ美少女の胎内を長い火かき棒で激しくかき回す。
にゅぽっにゅぽっにゅぽっ……。
女を殺すために作り出された豚の動きは粗雑であり、人間の男性の動きにはとても太刀打ちのできるものではなかったが、その突きは力強く、リディアの肉壺が十分に楽しめるものであった。
「あうう、あう……」
少女は茶色の髪を揺すった。女の汗で髪の一本が額に張りついている。豚は腰をかくかくとリズミカルに動かしてリディアの肉壺の中を激しくかき回す。透明な牝のエキスが刺激によって女の秘所と豚のペニスの隙間からとろとろと溢れ出してくる。
「ああ、ああ、ああ……」
リディアは甘く鳴いた。豚の獣臭さと、尻に当たる短く硬い毛の不快感はあったが、それ以外の部分では少女の体には何の不都合もなかった。獣に汚される屈辱感も、少年の励ましと許し、そして視線があるおかげで乗り越えることができた。男爵に対する少女の恐怖はまだ消えていないが、猥らな自分を主人の前で披露できることは、愛の奴隷であるリ

ディアにはむしろ悦びとなりつつあった。
「フィオ、ああ、フィオ、恥ずかしい、恥ずかしいわ……。でも、ああ」
リディアは主の言葉を求めていた。
「気持ちいいんだね？」
「ああ、うん、ああ、でも、ああ……」
豚の腰の動きが速くなった。少女の中ではまだ絶頂の果実は熟していないというのに。フィオであれば、少女が頂点に達していないというのに欲望を吐き出すということはなかっただろう。だが、獣はしょせん獣であった。
「ああ、うああ……」
少女の肉壺かようやく暖まり、これから女の中で快楽の大波がうねり始めるという序章の段階で豚は欲望を爆発させてしまった。
どぷぷ……。
白い汚れたエキスが女の肉壺の中にたっぷりと注がれ、少女は苦しげな表情を作った。
――こんなに恥ずかしい思いをしたというのに、たったこれだけの感覚しか得られないの？
少女の肉壺は明らかに消化不良を起こしていた。それがフィオにも他の女達にも分かった。だが。豚の力が発揮されるのはそれからであった。一度、精を放ったというのに、豚

のペニスが衰えるということはなかった。
「あ、あ、あ、あ……」
獣の性器は牝の匂いと、素晴らしい肉の味わいに刺激されてますます硬くなった。そして……。
「ああ、ああーっ、あーっ」
豚の腰の動きがさらに速くなった。やみくもに突き上げ、少女の小さな泉の中で狂ったように暴れまくる。一度、冷めかかったリディアの情欲の炎が一気にぶり返す。
「魔豚は女のエキスに反応する。一度、セックスを始めれば、女が絶頂に達するまでは決してやめようとはしない……」
男爵の声が響いた。男爵の言うとおり少女の肉華の中では豚の細長いペニスが激しく動いている。リディアは突然始められた高速の突き責めに白目を剥いている。
「ああ、フィオ、ああ、何、ああ、あそこが……」
リディアは絶叫した。そして、フィオも顔色を青くした。
「あんなに突いたらリディアの体が壊れてしまう！　義父上、お願いです。やめてください！」
少年は必死に懇願したが、男爵は取り合わなかった。そして、取り合う必要もなかったのだ。少女の股間はすでにフィオとのたった一度の、しかし激しいセックスによって強く

鍛えられていたのである。淫薬とフィオの精液によって改造されたリディアの肉壺は、豚の突きにも耐え、そして女の悦びを味わうことができるまでになっていた。そればかりか豚の突き上げに女の子宮は冷静に『豚の味わいは主人のものには遥かに及ばない』と認識していたのである。

「あ、いく、いく……」

リディアは言った。少女の中で快楽の花火が弾けようとしていた。だが、絶頂に達するというのに少女の顔には喜びの色はない。

――こんなにも違うの？

服従の秘薬の効果は絶大であった。リディアは絶頂に達したが、その絶頂の質はフィオのペニスのそれが与えてくれるものの数十分の一にも満たなかった。フィオとの初めての経験で手足がもげ、体がオーブンで焼かれるような熱く激しい絶頂を体験しているリディアには、豚とのセックスはやはりお粗末なものでしかなかったのだ。

「う……」

納得のいかない形で小さな丘を上りつめたリディアは、その場に四肢を開くようにして横たわった。豚もリディアが上りつめたことを見て取ってペニスを抜く。少女の愛らしい性器からは豚の精液がどっぷりと噴き出したが、少女の体は全く満足はしていない。むしろ生殺しのような責められ方をしたことでリディアの肉壺は大いに機嫌を損ねている。豚

のほうはやはり畜生でしかないということなのだろう。少女の可憐な肉壺からペニスを引き抜くと、さっさとポーラのほうへと這い進んだ。
「いい牝奴隷だ。主人の餌しか喰わぬというわけか……」
男爵はリディアの様子を見ながらそのように言った。男爵は全裸の役者達が演じる猥らな劇に大いに心を楽しませているようであった。
「……一回戦は豚の負けか。次はどうかな」
男爵は椅子の上で誰に語るわけでもなく言った。あるいは、仮面の怪物は他の二人の女達も豚による責めに打ち勝って、主人への肉の忠節を守り抜くことを知っていたのではないか。
豚はそんな男爵の思いを知ってか知らずか、素っ裸で尻を突き出したポーラに近づいていく。
「……き、来た」
美しい叔母は、すでにリディアが受けた恥辱を見ており、自分がどのような目にあうかを知っていた。そして、フィオがどのように考えているかも。
「フィオ……」
叔母はリディアよりも落ち着いていた。
「ポーラさん……」

豚に犯される叔母。少年はなるべく自分の中にある屈辱感を無視することにした。そして女達のことを励ますことに決めたのだ。

「大丈夫だよ。ポーラさん」

少年の言葉にポーラは小さく頷いた。と、豚の舌による責めが始まった。

「う、うう、ああ……」

美女は腹違いの兄のことを忘れることに決めたらしい。あるのはフィオと自分。自分と同じ牝奴隷達。そして猥らな豚。

美女はそれ以外の外野のことを無視し、自分の好ましいものだけを意識している。今、行っていることはすべて悪戯な少年が悦楽の宴を盛り上げるための余興なのだ。豚を指図しているのは可愛い甥っ子である。そう思い込んでしまえば恥辱的な仕打ちも耐えられないことはない。それどころか楽しいひとときにすらなりえる。フィクションであり、思い込みであり、現実とは異なるが、それでもそう信じ込めば、豚責めをもっと素直に楽しむことができる。弱者の知恵であった。

「フィオ……、駄目、見ないで……」

ポーラは少年を煽るように言った。彼女の視界にあるのは少年と他の女奴隷、そして一種の責め具となる豚だけである。あとのものはポーラの視界にはすでに入っていないのだ。

「こんな恥ずかしいところを……」

ポーラの懇願をフィオは無視して若く美しい叔母が豚に汚されるところを凝視している。リディアの恥部を弄んだ豚の舌がポーラの股間に伸びる。ちろちろと動く豚の舌はすぐにポーラの濃い陰毛の森に入り込んでいく。フィオはその様子を凝視している。

「ポーラさん、綺麗だよ……」

少年は自らのペニスを硬くして言った。彼にできることは女を落ち着かせ、励ますことだけであった。そして、彼の努力は大変な効果を上げていた。

「う、うう……」

美女は尻を突き上げたままの姿勢で呻いた。豚の舌は女の割れ目に入り込んでいる。肉の迷路のように不細工なポーラの性器は変態的な食事から死刑台での鳥羽根刺しの刑を終えて、もはや行き着くところまで行き着かないとどうしようもないまでに熱く燃え上がっていた。

少年が美しいと心底思う、成熟した牝の白っぽいエキスが女の割れ目からじゅくじゅくと湧き上がり、見事な原生林のごとき栗色の恥毛の上をべっとりと濡らしている。

「は、はあ、はあ……」

美女は肩で息をしながら、白い尻をくるくると回転させる。形のよい女の肛門はまるでミツバチを誘うたんぽぽのように少年には見えた。

「あう、あうう……」

畜生は美しい叔母の股間を舌で舐め回す。

ぴちゃぴちゃ……。

フィオだけが舐め、触り、そして中に入ることを許された神聖な蜜壺。女達を励ましながらも少年は自分の女奴隷達を横取りされて苦しんでいる。

「ああ、フィオ、駄目、あそこが……」

ポーラはうっとりとして言った。美女の股間はすでに洪水を起こしたようにべとべとになっている。豚もそのことをすでに知っている。そして、豚の爪がポーラの背中の上に乗った。

いよいよその時がやってこようとしていた。豚の硬く長いペニスがフィオの大事な女奴隷の肉薔薇のほうに向けられ、するりと女の胎内へと入り込んだ。

「うはあっ、はあーっ」

ポーラは喚いた。恥ずかしさと心地よさ、屈辱。さまざまな感情が女の中に溢れ、喚かずにはおられなかったのであろう。豚の陰茎は先端の部分から根元近くまで、ずっぽりとポーラの股間に埋め込まれていた。

「フィオ、ああ、フィオーっ、駄目よ見ては駄目っ」

ポーラは叫んだが、少年は叔母の叫びの本当の意味が「汚されることでさらに増す自分の美しさを見届けてほしい」というものであることを知っていた。

「あ、あ、動いている。ああっ」
ボーラはリディアよりも豚との交合を楽しんでいるようであった。二番手であるポーラにはそれだけの心の余裕があったのだろう。豚は牝奴隷の股間に突き刺したペニスを激しく動かし始める。
「ううっ……あっ、あっ、あっ、あああーっ」
前後への激しいピストン運動。豚の動きはリディアの時と同じように荒々しい。前進するだけで引いたり遊んだりするということがない。
ずぼっ、ずぼっ、ずぼっ……。
美女の柔らかい秘肉がえぐられ、真っ白い牝のエキスが豚の肉杭を伝わって床に流れ落ちていく。
「ああん、ううっ、うっ……」
美女は激しい突きをもらってあえいでいる。だが。ポーラは悲しげな視線をフィオのほうに送った。
――駄目、やっぱり駄目……。
ポーラもまたリディアと同じであった。フィオとの薬を使った最高のセックスを味わい、膣の中を改造されたポーラの体は、唯一の主人のペニスでなければ頂点に達することはできなくなっていた。否、頂点には達することができる。ただ、他の行為によってたどりつ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/